

## 第2回遺伝子・ゲノムセミナー報告書

2019年10月27日

報告者：京都薬科大学  
病態生理学分野 准教授 細木誠之

日時：2019年10月26日（日）14：00～16：05

場所：京都薬科大学 愛学館3階 愛学ホール（A31講義室）

主催：「本学における遺伝統計学研究プラットフォームの構築」（学内共同研究推進事業）

後援：多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン（文部科学省）

参加者数：70名（本学：67名（学部生37名、大学院生14名、教職員16名）、  
本学以外：3名（企業2名、他大学1名））

はじめに、赤路副学長から学内共同研究推進事業として本学における遺伝統計学研究プラットフォームの構築の概要をご説明いただいた。

第一部では、本学の臨床薬学教育研究センターの地寄悠吾助教から、遺伝子発現解析の一般的な手法と現在本学にて実施している解析プログラムを駆使した公共データベースからの標的遺伝子の抽出手法とその進捗情報をご説明いただいた。次に病態生理学分野の学部6年次生の吉澤正人さんから、がん標的遺伝子の解析と解析結果から抽出された因子の *in vivo* 系 *in vitro* 系での評価した結果について報告された。最後に臨床腫瘍学分野の中田晋准教授から、マイクロアレイ法にて標的分子を抽出し、細胞を用いて評価した研究結果を報告いただいた。

第二部では、国立がん研究センター研究所 ゲノム生物学研究分野 分野長 河野隆志先生から『国民皆保険のもとで行われる日本のがん遺伝子パネル検査』と題してご講演いただいた。2019年4月から遺伝子パネル検査が開始されたことに加えて、ご自身が国立がん研究センターにてがん遺伝子パネル検査の開発に携わられた経緯や、遺伝子解析結果をいかに治療に結びつけるかを検討する他職種連携でのエキスパートパネルの詳細についてもご説明いただいた。

遺伝子検査の結果、治療に導くことができるのはごく数%の症例であることや経済的問題、オンコパネルの検査機関である国立がんセンターが開発したもの（NCC オンコパネル）とアメリカにて現在幅広く行われているもの（foundation one）との差異、生殖細胞系列においての遺伝子変異が見つかった場合の遺伝カウンセラーの重要性など、検査が開始されても問題が山積していることにも言及いただいた。最後には河野先生がこれまで行われてきた分子標的薬の耐性克服を目指した研究成果についてもわかりやすくご講演いただいた。

講演後には新たな時代における薬剤師の重要性や検査内容の発展性や限界についての議論がなされ、閉会となった。



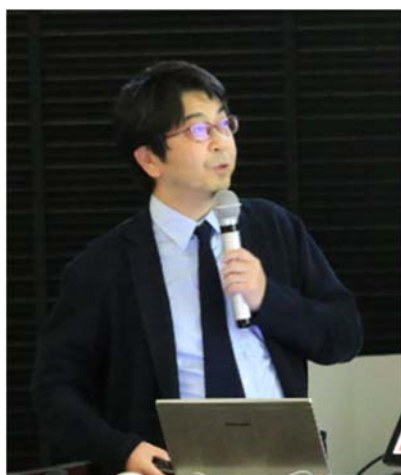
地寄 悠吾 助教



吉澤 正人 さん



中田 晋 准教授



河野 隆志 先生



セミナー風景